
あなたに逢いたくて

愛田雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたに逢いたくて

【Nコード】

N4199C

【作者名】

愛田雅

【あらすじ】

主人公の田辺陽子の前に、教育実習生の大塚先生が現れて・・・。

私が、中学3年の時、それはあった。そう、あの時、あの先生と私は出逢ったのだ。先生は、教育実習で私の学校に来ていたのだった。見た目は、はつきり言って二枚目タイプではなかった。でも、私はなぜか先生に惹かれるものを感じたのだった。

教育実習の始まる数日前には、担任の先生から教育実習生が来ることを告げられていた。たったそれだけのことなのに、新しい先生が来ると思うだけでわくわくしてしまった。もちろん、先生はずっと私たちの中学校にはいないけれど。

「今日から2週間、教育実習としてこの学校に来ました。えーっと、名前は、大塚秀平です。よろしく！」

まだ大学生の大塚先生は、黒板に大きく自分の名前を書くと言った。さわやかなんだけど、字はとても汚かった。

大塚先生の授業を終えた直後の休み時間になると、私は真後ろの席に体を向けた。

「ねえねえ、陽子。あの教育実習の先生のこと、どう思う？」

「ほえ？」

私の友達の、吉田恵がそう言ってきた。

「どうって、何が？」

私が、恵に聞き返した。突然、どう思う？ って言われても、あまりにも質問の内容が漠然としていて、何が聞きたいのかわからない。

「さわやかな感じで、ちょっとイイ感じじゃない？」

恵は、大塚先生にかなりの好印象を持っているらしい。

「そうだね。若々しくっていいかもね」

恵の言葉に動揺していた。もしかして、ライバルなのかなって思った。決して二枚目ではとは言えない大塚先生だけど、誠実そうで

懂れてしまっ。

「やっぱり、そう思う？ 同級生たちとは違うさわやかさがいいんだよね」

頬杖をついて、さっきまで大塚先生がいた教卓を恵は見ていた。さすがに、私は恵ほど大塚先生に好意を持っていけないと思った。そこまでうつとりした顔は、今の私にはできそうにない。

そんな私が、教師になるんだと思わせるようになったのは、この直後であつた。

「ねえ、陽子って看護婦になるんでしょう？」

「うん、看護婦になつて人の命を救うのだ！」

私は、いつもそう言つていた。小さいころから、看護婦にあこがれていた。白衣を着て、患者さんに優しく接し、そして、患者さんの命を救う。なんて、かつこいいんだろう。

「看護婦つて大変だと思ふけど、まあ、陽子なら平気かな？」

こんなことを言つていた私が、何故教師の道を選ぶことになつたのか……。

放課後、恵と私は、大塚先生にいろいろと話を聞くことにしてみた。ホームルームが終わると、二人揃つて大塚先生のいる教卓へ行った。

間近で大塚先生を見ると、とても背が高い。他の男子と比べても背が高く、今までこんなに背の高い男性を近くで見たことはなかった。ほんの少しドキドキしてしまつた。

教室をすぐに出ようとしていた大塚先生だつたけれど、私たちに気がついてその場で待つていてくれた。その表情はにこやかで、学校の先生という職業が好きなのだらうなと思わせた。

「ねえ、先生つてどうして先生になろうと思つたの？」

単刀直入に聞いてみた。今、先生つて仕事は大変だつて思うし、つらいことも多いはずなのに、どうして中学校教師を選んだんだろう？ っと思つて。

大塚先生は腕を組んで、少し間をおいてから答えてくれた。

「そうだなあ・・・、俺が中学のときの担任がすごく良い先生でさあ、俺もあんな先生になれたらって思ったって感じたな。」
「へ〜。」

恵がなるほどと言いたげにそう言った。

その後、私たちは、いろいろな話を大塚先生とした。それが、ものすごく楽しかった。きっと、この時に私は先生に惹かれるものを感じていたのだろう。そして、私も教師になりたいという心の種を蒔かれたのだと思う。

次の日も休み時間に質問をしたり、放課後には世間話などをしていた。たったそれだけのことなのに、とても楽しく感じた。

まだ、恋だとは気付いていない自分。でも、先生と話がしたいと思う心。その心だけで、私は、毎日先生と話をしたのだった。

1週間がたち、その週は私が教室の掃除当番になった。

「おっ！ 今日から田辺は教室当番だな。しっかり、掃除しろよ〜！」

放課後になると、すっかり仲良くなった私に大塚先生がちょっかいを出してきた。

「失礼ねえ。私は、先生と違って、ちゃんと掃除します！」

「言ったな。目を皿のようにして田辺が掃除してるところを見るからなっ！」

「どうぞ、ご覧ください！」

もちろん、私はしっかり掃除をした。しかし、先生も手伝ってくれた。

「頑張ってるじゃないか。」

「先生もね。」

そう言いながら、みんなで掃除をした。私が、机を運ぼうとして机をずるずるひきづっていたら・・・。

「お前、ちゃんと持てよ。みんな、ちゃんと持ってるだろう。」

「重いじゃん！」

そうなのだ。すべての机の中が空というわけではなく、教科書を置いて行っている人や、掃除中の人の鞆が置いてあったりして、重たい机が多かった。

「力ないなあ。よし、俺が運んでやるから、しっかり掃くんぞ。そのあとは雑巾がけな。」

「らじゃ！」

優しいなあ……。怒られるかな？って思ったけど、怒られなかった。普通は、何が何でも机を持たせると思うんだけどなあ。こんな私のことを女の子としてみていてくれるんだ……。そう思った。クラスの男子とは大違いだ。

ズキンッ

えっ？

もしかして……。私……。

この時に、初めて気がついた。先生に恋してるんだって。先生のやさしさに触れて、やっと気がついたんだ。教室掃除の当番にならなかったら、気がつかずに終わっていたかもしれない。そして、教師になることもなかったのかもしれない。

そんなこんなで、2週間はあっという間に過ぎてしまった。

「えーっと、今日でみんなとはお別れです。寂しいけれど、みんなからいろいろなことを教えてもらいました。俺からもみんなにいろいろなことを教えたつもりですが……。俺が、みんなから教わったことのほうが多いかな？ えっと、俺は、これから頑張って中学校の教師になりたいと思います。みんなも自分の夢をあきらめずに、頑張ってください。夢は、かなえるためにあるものだと思いますから。もし、道端で俺に逢ったら気軽に声でもかけてください。」

先生は、照れながら最後のお別れの挨拶をした。

私は、心の中で、たくさん先生には教えてもらったよって言っていた。そして、頑張つて良い先生になつてね！　って。そう思いつつも、やっぱり、心の中では泣いていた。もつと、ずつと先生と一緒にいたかった。教育実習生なのに、とっても教育熱心だったし、優しくかつたし、明るくて、楽しくて・・・・・・。

「良い先生だったねえ。」

恵が言った。気が抜けて寂しそうに聞こえた。やっぱり、先生は誰から見ても良い先生なんだなと思って思ったら、ちよつとだけ嬉しくなつた。

「そうだよねえ・・・・・・。ちよつと寂しいよねえ。」

「うん。ずつとあの先生に教わりたかつたよねえ。」

先生は大人気だった。若いつて言うのもあるんだろうけど、明るくて元気で優しくて・・・・・・。本当に良い先生だったから。

偶然に先生に逢える事を期待してみたけれど、結局、そういうことはなかった。でも、私は先生に逢う為に、先生に刺激を受けて、中学校教師になろうと決意した。

そして、今、私は教員免許を取つた。そう、大塚先生に逢う為に。大塚先生のような先生になりたい為に。看護婦になりたかつた私を教師の道に変えてしまった。本当に良い先生だったから。教育実習生のときにあんなに良い先生だつて思わせたんだから、きつと、今でもすごく良い先生でいるはず。

大塚先生と同じ学校に行けるかな？それは、ちよつと難しいと思うけど・・・・・・。

いつの日か、大塚先生に逢えますように・・・・・・。

（後書き）

数年前に書いた小説です。続編を近日公開予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4199c/>

あなたに逢いたくて

2010年10月8日15時10分発行